

ボーダー・エコノミー

—サバにおけるプギス移民の生活戦略—

伊 藤 眞

I はじめに—ボーダーレスの中のボーダー・エコノミー

本稿であつかうのは、マレーシア・サバ州におけるインドネシアからの移民、そのなかでもっとも多数を占めると見なされているプギス移民¹⁾の生活戦略についてである。

南スラウェシをホームランドとするプギス人は17世紀末より島嶼部各地にコロニーを建設し、その旺盛な交易活動で知られてきたが、今日のサバにおける彼らの生活戦略を特徴づけるのは、ボーダー（国境）を前提とした生業のあり方である。そうした生活戦略をここでは「ボーダー・エコノミー」（border economy）と呼んでおこう。「ボーダー・エコノミー」という語は、経済学では、国境を接する二国間の相互協力にもとづく経済を指し、「国境経済」とも訳される。それに対して、ここでは境界的な地域における人々の生活の仕方に焦点をあてこの語を用いている。

今日、グローバル化の中で「ボーダーレス」化が進行し、モノ、人、情報が比較的自由に行き来する経済のあり様は「ボーダーレス・エコノミー」とも呼ばれている。そうした「ボーダーレス・エコノミー」と、ここでいう「ボーダー・エコノミー」とは、ことばの上では対立するようでいて、実際は互いに対立し合うものではない。むしろ、ボーダーレス的な状況の中においてなおかつボーダーが存続するからこそ、二国間の経済協力がアジェンダになりうるように、そこに生きる人々にとっても、ボーダーの存在とボーダーレスな状況とは、不即不離な関係である。たとえば、ボーダーのこちら側と向こう側のあいだに存する大きな価値の差異に目をつけて、密輸して一稼ぎしようとする者もいれば、自らの労働を商品として高く売ろうとする者もいる。いいかえるならば、鉄壁のようなボーダーでは、リスクが大きすぎではじめから話しにならないかもしれないが、ボーダーとボーダーレスの状況とが微妙な均衡状態にあれば、人々はその綱渡りに興味を示すだろう。実際、そうした微妙なバランス状態の上にあるボーダーというのは、世界の諸地域でそれほ

どめずらしくないし、少なくともマレーシアとその近隣諸国地域との間の関係は、そうした事例のひとつになりうるのである。

とはいうものの、本稿の目的は、ボーダー一般についての考察をおこなうことではなく、冒頭で述べたように、ブギス人移民の生活戦略を俯瞰的に表す語として「ボーダー・エコノミー」なる語を用いているにすぎない。かれらはどのようにボーダーを越えるのか、それはどのような条件において可能なのか。ボーダーはどのように利用されるのか。こうしたボーダーにまつわる諸点に注目しながらブギスの生き方について見ていくことにしよう。

Ⅱ サバと南スラウェシ

2-1 国境、交通（パレパレーヌヌカン）

南スラウェシから見てサバ²⁾は、もっとも近い国外の地である。両者を隔てているのは、東西に細長く弓状にのびる北スラウェシとフィリピン南部のスルー諸島によって囲まれたセレバス海である。サバに至るには南スラウェシからはマカッサル海峡を横断し、東カリマンタン州沿岸部にそって北上するだけでよい。

今日、南スラウェシからサバに向かう場合、マカッサルから北へ約 180 キロの距離にあるパレパレー港から定期船に乗るのが一般的である。南スラウェシの人々だけでなく、東ヌサンタラ州フローレスなどからの移民もこのルートを利用する。3社の船が週に計 11 便もある。パレパレーを出発すると一晩の航海で東カリマンタン州北部のヌヌカン島（2003 年より郡から県に昇格）の港に到着する。ヌヌカン島はカリマンタン島本土からはスピードボートで 2 時間ほどの海上にあって、むしろサバとの距離の方が近い。乗客はヌヌカンでパスポート、査証、もしくは越境パスなど³⁾の手続きをおこなった後、定期船フェリーでサバ州南端の町タワウに向かう。あるいは、ヌヌカン島の北東に隣接するスバティック島にまず渡り、そこでタワウからの求人情報を待つ場合もある。スバティック島は、島の東西をインドネシア領とマレーシア領を分かつ国境線が横切るサバにもっとも近い島であり、タワウからスピードボートでわずか 15 分ほどの距離だからである。なお、ヌヌカン、スバティックには、サバでの仕事を紹介する通称「チャロ」(*calo*)と呼ばれる斡旋業者が数多く存在する。政府はチャロを仲介とすることに警告を発しているが、手続きの煩瑣な県の職業紹介所を利用するよりも、チャロを介して職場探しの方が一般的である。但し、こうした仲介者を通さず、親族・知人を頼って（密）入国するケースも少なくない。

2-2 歴史的背景

タワウはサバとインドネシアとを結ぶ国境の町である。岸壁に立つと目の前にスパティック島の島影が見え、ボートがタワウとスパティック島の間を頻繁に往来しているのがわかる。大半は、越境バスを使って、物資を運搬する船である。インドネシアからの移民、出稼ぎ者の大部分がこの町からサバに上陸し、まずはこの町の周辺で職探しをおこなう。

実際、タワウはブギス人にとっても、サバにおいて古くからもっともなじみ深い町であり、しばしばサバにおける「ブギスの故郷」⁴⁾ともいわれるほどである。町の中央にあるモスクは、富裕なブギス人の寄進（wakaf）によるもので、宿のない到着したばかりの移民らは、しばしばこのモスクで夜を過ごすという。

タワウ地域を中心にブギス人とサバとの関わりを見た場合、おおよそ4つの時代、すなわち、①「スールー・ゾーン」の時代、②イギリス北ボルネオ会社統治から日本軍占領期まで、③イギリス統治時代、そして④マレーシア独立から現在に至る時代に区別することができる。つぎに、簡単にその特徴を見ておくことにしよう。

①「スールー・ゾーン」の時代

18世紀から19世紀中頃まで、スールー諸島、ミンダナオ、北スラウェシに囲まれた地域は、オーストラリアの歴史家ワレンによって「スールー・ゾーン」と名づけられたように、ホロ王国を中心とした一大交易地域をなし、ブギス人はタウスグ人と並んでそこでの交易の担い手として重要な役割を演じた。当時、ブギスはセレベス海とマカッサル海峡沿岸部にいくつかの交易拠点（北スラウェシのマナド、トリトリなど）を確立していた。ブギス人は、香料（クローブ、ナツメグ、黒胡椒）、ツバメの巣、砂糖、米、綿布、そして奴隷といった交易品をもってきて、それと交換に、銃・火薬、兵器などを得ていた。ホロのスルタンとブギスとの貿易は1870年頃には終わりをつげるといわれるが、その頃になるとすでにタワウに定着するブギス人が現れ始めていた。交易者として交易品の採集や食糧・水の補給のために一時的にサバを訪れ逗留する者はそれ以前からあったといわれるが、初期の定着者として名を残しているのは漂着者とその子孫たちである。

タワウにおける初期の定着者の由来についてはふたつのバージョンがある。いずれもブギスの一団を乗せた船が難破し、乗組員の一部がタワウの地に上陸することになるのだが、ひとつのバージョンによれば、シンガポールに向かう航海中に難破、漂着したといい、もう一方のバージョンでは、オランダとの戦いに敗れたことを恥とするボネ王国の貴族たちの一団がボネを出帆したが難船し、その一部の者がタワウに漂着したというものである。オランダとボネ王国の戦いといえ、1840

年、または1865年頃の出来事であるが、いずれもそれを支持する記録や伝承はなく曖昧である。19世紀後半のタワウについては、その当時、ティドゥン人が移動農耕をおこなっていたことが人々の間でおぼろげに記憶されているぐらいである。

②北ボルネオ会社統治期から日本占領期

サバ州の前身は、1882年、ブルネイ王およびスルー王の領地を北ボルネオ会社が買収したことに始まる。在来の住民としては内陸部にカダザン・ドゥスン人、イバン人、ムルット人など、沿岸部にバジャウ人、マレー人などが居住していた。北ボルネオ会社は統治開始後まもなくプランテーション経営に乗り出すが、元来、人口稀薄な地域であるため、外部から労働者（ジャワ人、中国人）や資本（日本）を導入した。

タワウには、1892年に北ボルネオ会社の支局が設置された。その当時、登録された住民数はわずか200人前後であり、町の中心部の土地をもっていたのは「ブア・アド」⁵⁾と呼ばれるブギス人だった。この人物は、先の初期定着者の一人であり、その指導力から北ボルネオ会社によって最初のネイティヴ・チーフ（Penghulu = Native Chief 原住民首長）に任命されている⁶⁾。

北ボルネオ会社の統治時代、タワウ周辺におけるブギス人移住者の増加は微々たるものに過ぎなかった。オランダ領東インド（現在のインドネシア）からの労働移動の主力はもっぱらジャワ出身の契約労働者であった。1920～30年代を知る古老によれば、その当時にブギス人が最初に拓いた集落としてカンボン・スンガイ・イマム（*kampung sungai Imam*）と1937年に拓かれたカンボン・ラングウ（*Kampung Rangu*）があったが、いずれも世帯数20戸を越えるものではなかった。「スルー・ゾーン」を構成した巨大な交易圏はもはや存せず、貿易は北ボルネオ会社と、急速な勢いで商業活動を拡大させていた中国系商人によって掌握されつつあったから、もはやブギス人がその領域に介入する余地はなかったのである。

なお付け加えるならば、北ボルネオ会社時代、タワウ郊外には日本人経営による農園がいくつか拓かれた⁷⁾。日本人が最初に農園経営に乗り出すのは1912年であり、その後、窪田農園、久原農園が拓かれた。久原農園はその後、日産農林と改称、サバにおける最大規模のモステン農園を拓いた。日本人による農園経営には、日本人労働者が多く採用され、園内には日本人小学校も建設された。それはいわば、「日本人村」の観をなした。この日産農林の農園は、戦後イギリスによって没収され、「ボルネオ・アバカ・株式会社」（通称BAL）エステートとして生まれ変わるのである。

③イギリス統治時代 (1945～1963)

第2次世界大戦後、北ボルネオ会社はサバ経営から撤退し、代わってサバは「イギリス領北ボルネオ」(British North Borneo)と呼ばれるようになる。サバのイギリス統治下において「ボルネオ・アバカ・株式会社」(BAL=Borneo Abaca Lit.)のエステートがタワウ近郊に開かれた。ゴム、麻を主に栽培し、同地域では最大規模のものであった。同エステートは1953年にカカオの試験栽培を開始し、それ以後、エステート労働者としてインドネシア人を多く雇用したが、その半ば近くがスラウェシのブギス人であった。エステートでの労働は厳しかったというが、園内には家屋、学校、医療施設も備えられており、1950～60年の間、政治的混乱期⁹⁾にあったスラウェシと比べればはるかに生活は保証されていた⁹⁾。

1963年初頭は、スカルノによる、マレーシア構想に対する「対決政策」(*konfrontasi*: コンフロンタシ)により、マレーシアとインドネシア両国の政治関係が極度に緊張した時期であった。インドネシアからの労働者は帰国するか、マレーシア国籍を選ぶかの二者択一を迫られた。インドネシア人に対する風当たりは強かったが、とどまった者には最終的にマレーシア国籍を与えられることになった。

④マレーシア独立以後～現在まで

1963年8月、英領北ボルネオはサバ州として、マレーシアの独立にその一員として加わった。1970年代に入るとサバでは森林産業が拡大し、一方エステート事業もそれまで以上に外国人労働者を雇うようになる。とくに、独立後はじめての多民族政党といわれる「ブルジャヤ」(Berjaya)が政権与党になる(1976～1985)と、移民を積極的に導入し、不法移民に対しても寛容な政策がとられた。外国籍の者に対しては、「国民登録身分証明書」(the National Registration Identity Cards、通称「ブルー・カード」と呼ばれる)の発行することで、インドネシアからの出稼ぎ者、不法移民の大量な流入を加速化させることになった¹⁰⁾。

なお、インドネシアからの移民が増大した1970年～80年代の時期、移民を送り出す側の南スラウェシでは村落社会における生産人口の流失が問題視されるようになった。また、おもな出稼ぎ・移民先が、スマトラ(ジャンビ、リアウ)から東カリマンタンへと移りつつあることが指摘されている。南スラウェシの村人は、出発にあたり村役場に行く先として「東カリマンタン」と報告するが、そのかなりの部分がサバに渡って来ると考えられている¹¹⁾。

1980年代半ば頃になると、運輸、輸出輸入業などの分野でブギス人企業家の台頭が見られるようになる。マレーシア国内において高等教育を受ける機会を得たブギス移民二世の中からは、サバ政府の幹部公務員、銀行員、そして医師、弁護士などの専門職に就く者も現れ始め、ブギス移民社会における新興のエリート層を形成

するようになった。彼らの多くはBAL エステートないしタワウではほぼ同じ時期を過ごしており、1985 年には彼らが中核となって「サバ・ブギス福祉会」(Persatuan Kebaikan Bugis Sabah=PKBS)を結成し、のちにはサバの地方政治にも発言力をもつようになっていくのである。

以上、ブギス移民との関わりにおいてサバにおける政治経済的な流れを簡単に見てきた。繰り返すならば、サバ州の産業のきわだった特徴は、その大小多数のエステートと木材業であり、それらにおける外国人労働者への依存度の高さである。エステートでは、商品作物としては戦前においては、タバコ、ゴム、麻、近年においてはココヤシ、カカオ、油ヤシと推移し、最近ではとくに油ヤシ生産の占める比重が圧倒的に高い。他方、エステート経営を支える労働の大部分は、隣国からの外国人労働者、とくにインドネシアからの労働者に頼っている。サバ経済は外国人労働者なくしては成り立ち得ず、他方、インドネシア、フィリピンなど隣国における労働市場の狭さとマレーシアとの大きな賃金格差が、つねに外国人労働者を引きつける導因となり今日に至っているのである。

Ⅲ ボーダー領域としてのサバ—新聞記事から読むボーダー領域

従来から、多くの外来者を招き入れ、さまざまなナショナル・アイデンティティをもつ人々が共存するサバは、それ全体がひとつのボーダー領域をなすといってもよいだろう。ここでは新聞記事を手がかりとして、そうしたボーダー性を表すものとしての不法居住地、不法滞在者(人の流れ)、そして不法な物のながれとしての密輸に注目してみたい。

(1) 不法居住地(スクォッター地域)

サバでは不法居住地を容易に見出すことができる。郊外に広がる住宅地とは対照的に、小ぶりな杭上家屋が海岸線にへばりつくように密集している区域をとところどころに見かける。あるいは、丘の急な斜面に不自然に並んだ小屋を見かけたならば、それらは不法居住地であると思ってほぼまちがいない。

ところで、そうした不法居住地の住民は必ずしも不法滞在者であるとは限らない¹²⁾。都市で生業を立てる地方出身者、マレーシアに長らく暮らしているフィリピン、インドネシアからの移住者たちが多くを占める。そうした雑多な人々がつくり上げる非均質的な空間が、不法滞在者にとっても紛れ込みやすい場になっていると言った方が正確だろう。

タワウ周辺の不法居住地として著名なのは、旧空港周辺の丘に広がるカンボン・

セントサ、そして町はずれの沿岸部にあるカンボン・ティティガン（通称、カンボン・アイスボックス）、カンボン・ヒダヤットである。カンボン・セントサは南スラウェシからのトラジャ人がまとまって暮らしおり、すでに落ち着いた村の体をなしている。これに対して、カンボン・アイスボックス、カンボン・ヒダヤットは、フィリピン南部出身者やインドネシアからのイスラーム住民が多いといわれ、しばしば、入国管理局による一斉検査が行われている。1998年3月に実施されたこのふたつの不法滞在地における一斉検査によれば、3555人中162人が不法入国者であったと報道されている¹³⁾。また、2001年3月に実施された同地域における一斉検査では、4757人中1036人の住民及び不法滞在者が検挙され、その内の1人は身分証明書及び越境パス¹⁴⁾の偽造団のメンバーであるとの容疑で逮捕されている¹⁵⁾。

不法居住地は、都市整備を行おうとする政府にとっては望ましくない存在である。とりわけ、カンボン・アイスボックスのようなところは、劣悪な衛生状態でかつ犯罪の温床とも見なされている。けれども、こうした不法居住地は、容易になくなるとは思えない。というのは、人の止めようのない流れがある限り、そうした人々を一時的に受けとめる緩衝地帯としての役割をつねに期待されているからである。

(2) 不法滞在外者

マレーシアにおける不法滞在外者の数は、取締規則の強化に応じて、上下変動を繰り返している。たとえば、1992年9月サバ州副首相はつぎのように指摘している。

「サバ全体では80万人以上の外国人がいると考えられ、そのうち7万人は避難民として分類されうるが残りは、正規の旅行書類を所持しない不法移民である。」
(1992年9月21日付デイリー・エクスプレス紙)

ここでいわれる「7万人の避難民」とは、政治難民として認定されたフィリピン南部からの人々であり、その残りは不法移民であると見なされているわけである。但し、不法労働者の正確な数値は、事柄の性質上からその実態は把握困難である。

タワオ市当局は、「インドネシア、フィリピンからの不法入国者数が、タワオの居住者数を上回ったと発表した。マレーシア市民247,000人に対して不法入国者はおよそ25万人いることを明らかにした。また同時に、連邦政府サバ支局が数年間調査した結果によれば、不法入国者は58,784人に過ぎないことに疑問を呈した。」
(1995年11月9日付けデイリー・エクスプレス紙)

より最近の状況について述べると、2002年8月からマレーシア政府は新入国管理法を施行した。違反者には罰金並びに鞭打ち刑を科すという厳しい内容のもので、刑罰を恐れたインドネシアからの不法労働者たちの多くがヌヌカンに殺到した¹⁶⁾。これを期に、マレーシア政府は「我々の国の不法滞在外者は一掃された」と宣

言したが、その2年後には再び「70万人の不法労働者が送還される」(2004年10月18付けファジャール紙)と報道されている。これらの記事を見るならば、多数の不法労働者がいったんは出国したものの、再び入国していることが想像できるだろう。

不法労働者が多い理由としては、渡航者が経済的、時間的問題から入管手続きをしないのに加え、マレーシアでの雇用主側の問題として、不法労働者の方が賃金を安く済み、またいつでも解雇できるという事情がある。さらに、より構造的な問題として、現実にはエステート、工場からの需要があるにもかかわらず、マレーシア政府が建前として未熟練労働者の入国を受け入れない方針をとっていることに帰着するとの指摘がある¹⁷⁾。こうした結果、「毎週50人～200人をインドネシア側に送還」し、数年おきにエクソダス(大脱出)が繰り返されることになるのである。

(3) 密輸

サバの経済は北ボルネオ会社統治以来、エステート産業とバーター貿易(barter trading)によって支えられてきた。バーター貿易は政府公認の、現在でも継続している有効な取引方法である。インドネシアとサバ州政府との協定により、スパティック島ウォレスペイ(地名)で公式の「バーター貿易」がおこなわれており、サバからは40の企業が参加し、「タワウ・バーター貿易協議会」を結成している。また、タワウにバーター貿易取引用の港湾施設の建設計画が進められている。サンダカンでも、フィリピンとの間で同様の計画が進められている。インドネシアからのおもな輸出品として認められているのは、木材(1998-2002年)、ロタン(籐)、市場用の乾物品などである。こうした公認された品目のほかに、多量の禁制品の流出入がある。あるブギス人は、「財をつくる秘訣はバーターにある」と語ったが、それはそうした禁制品の持ち込みを意味するのだろう。

インドネシアからサバへの密輸の中でもっとも問題視され、かつ規模が大きいのは木材である。インドネシアでは1980年代森林保護の立場から丸太材の輸出を禁止していたが、1998年に禁止が一部解除されると書類偽造などで不法な伐採が加速される結果となり、マレーシアに輸入される木材の70%は盗伐材といわれるほどになった。そうした盗伐は、マレーシアを経由してさらに中国、日本などにも輸出されている。一方、マレーシア政府も、インドネシアからの安価な材木の流入から国内の材木市場を保護するために、2002年にはインドネシアからの材木輸入(合法材、不法の盗伐材を問わず)を禁止し、ニュージーランドからの木材輸入を促進する措置をとっている¹⁸⁾。こうした動向を見るだけでも、盗伐材の輸出入問題が、インドネシアとマレーシアという二国間の問題にとどまらず、国際市場の動向にもかかわる問題でもあることがわかるだろう¹⁹⁾。こうした背景の中で、近年で

は、サバの企業家が直接製材機械を東カリマンタンに持ち込み盗伐に関わったとして検挙されている。また、ブギス企業家の中には、二重国籍を利用し、サバと東カリマンタンとの間を頻繁に行き来している者もある²⁰⁾。

木材よりも、よりローカルな密輸品として、米、タバコがある。米は日曜市場に出回りが、密輸タバコ、とくにインドネシア製の丁字入りタバコの存在は、非常に身近な存在である。たとえば、タワウの町では、夕方ともなれば、屋台やレストランのどこでも、小さな木箱を首にさげてタバコを売る少年や若者の姿を見かけることができる。マレーシアでの丁字入りタバコの価格は、インドネシアでの価格のおよそ2倍であるから、それを持ち込めば誰でも比較的容易に簡単なビジネスができるのである。

こうしたインドネシアからの密輸品に比べて、マレーシアからインドネシアへの密輸品の中には非常に危険な物も含まれる。2001年には、フィリピンから入手したという銃器・火薬類の運搬人インドネシア人12人とマレーシア人2人がタワウで逮捕されたが、アンボンのイスラーム教徒に手渡すためであったといわれる²¹⁾。また、「コンパス」紙は、東カリマンタン州タラカン市内の倉庫で押収された約2トンのニトロ・アンモニア化合物（爆薬材料となる）がタワウより密輸されたものだと報じている²²⁾。

Ⅳ サバにおけるブギス人—ケース・スタディ

それではブギス移民・出稼ぎ者はどんなところで生活しているのだろうか。おそらく数字の上では、プランテーション、油ヤシ工場、木材工場といった町から数十キロは離れた郊外で暮らす者が多いだろう。そうしたタワウ郊外の政府系資本のあるエステートを訪れた際、そのマネージャーはエステート内で働いている70パーセントはインドネシア人であると語った。エステートでの労働の大半は、働き手としてしばしば不法労働者に任されている。というのは、地元の人は、アブラヤシ農園でのきつい仕事を好まず、また不法労働者にとっては、宿舎と食事付きで、しかも官憲の手が及びにくい外部とは隔離された場所で過ごすことは少なくとも当座は好都合だからである。といっても、エステートだけではなく、町中でも比較的容易にブギス移民を見つけることができる。それは市場の野菜売りや魚売り、食堂のウェイター、ウエートレス、お手伝いさん、そしてタクシー運転手などである。コタキナバルの空港に降り立ち、タクシーを拾うとその運転手の大半は華人かブギス人である。マレー系の顔をしていたら、その7割方がブギス人だと考えてもいいだろう。コタキナバルを含むサバ西海岸地区のタクシー運転手組合の登録会員約1300のうち、600人ほどがブギス人だといわれる。一方、タワウの場合は、空港に出入

りしているタクシー 25 台のうち 23 台をブギス人が運転しているという²³⁾。

つぎに 3 人のブギス人を紹介しよう。その 3 人は、ボーダーに関してそれぞれ異なる関わり方をしてきた人々である。最初に紹介するハジ・スンナンはマレーシア独立以前のサバで生まれたという意味では、生まれつきのマレーシア人である。つぎのハジ・パッティロ氏は、マレーシアの独立直前にインドネシアからサバに渡り、後にマレーシア国籍を取得し、現在ではマレーシア人として生活しているタクシー運転手の古参である。最後の、リッキーは、10 数年前にマレーシアに密入国したものの、その後パスポート、ビザを取得して再入国し、タワウ郊外の合板工場で働いているインドネシア人である。

4-1 ハジ・スンナン (1927年、カンボン・スンガイ・イマム生まれ)

最初に紹介するハジ・スンナンは、タワウに住む最年長者の一人として、ブギス人から慕われていた人物である。同氏は 1927 年にタワウ郊外のカンボン・スンガイ・イマムに生まれた。同集落は、古くからブギス人のカンボンとして知られており、ハジ・スンナンの少年時代、そこには約 20 世帯あって、ティドゥン人の一世帯をのぞくとブギス人世帯であったという。ハジ・スンナンの父親は南スラウェシのワジョ地方出身であり、当初は集落で商売をしていたが中国系商人が進出してきてからは、漁師を営むようになり、スンナン氏もそれにしがった。同氏によれば、27 年間漁師を営み、17 年間タワウの魚市場で魚を売ったという。その転機になったのは、1953 年北スラウェシを中心におきたペルメスタ反乱 (Permesta) の頃で、武器や食糧をスラウェシのパル (Palu、中部スラウェシの州都)、トリトリ (Toli-Toli)、ドンガラ (Donggala) に送り、スラウェシからはコブラをもってきた。武器は、フィリピンのスルック人から中国人商人を経由して入手したといい、2 年間そうした商売を続けてから、そのときの利益をもとで魚商人に転じたとのことである。

ハジ・スンナンは、生涯に 5 人の女性と結婚している。最初の妻はパレンバン・チナ (6 人の子ども)、2 人目がブギス人、3 人目がバンジャール人、4 人目がエンレカン人 (エンレカンは南スラウェシの県名。ブギスとトラジャの居住地域の間位置する)、5 人目がジャワ人で計 21 人の子どもがいる。その子供たちは現在、クアラルンプルに 4 人、コタキナバルに 5 人、ラブアンに 4 人、インドネシア (サマリンドとボゴール) に 3 人、残りはタワウにいる。メッカ巡礼のときには、ボゴールにいる娘に手配してもらい、インドネシアからの巡礼団に加わったという。ジャワ人の妻からの息子は、ブルジャヤの時代にサバ州議員になった有力者でもある。どの子どもたちは、それぞれ社会的に成功している。

4-2 ハジ・パッティロ (1940年バリックパパン生まれ、コタキナバル在住)

ブギス人のタクシー運転手が現れ始めたのも 1980 年代からだという。1970 年代当初は交通・運輸業といえば、華人が多数を占めていたが、そこにじょじょにブギス人が参入し、町と町を結ぶバス経営に乗り出す者、そして自営でタクシー業を営む者が出てきた。多くの華人にとっては、タクシー運転手になることは、それほど割の良くないビジネスかもしれないが²⁴⁾、ブギス人にとってみれば、自前で車をもち人に指図されずに自由な時間に仕事をすることは、それなりの「ステイタス」である。つぎに、コタキナバルにおけるタクシー運転手の最古参の一人といわれるハジ・パッティロの経歴を紹介しよう。

ハジ・パッティロは東カリマンタン州のバリックパパンで生まれた。父親は南スラウェシ、ボネ島のトンラ出身である。バリックパパンでは父親の手伝いで農業をしていたが、1961 年にタワウにやってきて、トンラ出身の女と結婚し二人の娘がいる。1963 年まで BAL エステートで働いた。その当時、タワウから上陸するには身元保証人がいればよく、BAL エステートには父親のイトコがすでにいたので容易に身元保証人を見つけることができたという。

1963 年、*Barisan Menbebaskan Rakyat Sabah* (「サバ人民解放戦線」) に加わった。メンバーは約 2000 人おり、ジャワ人、ブトン人も含まれたという²⁵⁾。しかし、1964 年に逮捕され、1967 年まで監獄にいた。釈放されてからは、タワウにもどって生活することは許されず、コタキナバルで監視されながら暮らさなければならなかった。その時期、毎朝 6 時に家を出て、夕方 6 時には帰宅しなければならない生活だった。最初の 1 年間は、港湾で働き、そこで車の運転を覚えた。公共事業局でも 1 年間働き、その後、ふたつの日系の建設会社、ケニンガウでの木材運搬業を 3 年間、それからまた港で 1 年間、といった具合に仕事を転々とした。そして 1980 年からタクシー運転手を始めた。その当時は、ブギス人のタクシー運転手は稀で、ダエン・マララの方が同氏より先にいるだけだった。そして、1981 年には自分の車で仕事をするようになった。またこの間、1975 年に通称「赤いカード」(*kartu merah*) と呼ばれる永住権を、1985 年には国籍を取得しているが、前科があったために国籍取得には通常よりも時間を要したという。

タクシー運転手という「ビジネス」についてハジ・パッティロはこういう。

「タクシーなど運送業という職業は、ブギス人にとってとりやすい職業だった。私は港湾の仕事でフォークリフトを扱い、車の運転を覚えた。伐採キャンプでもそうやって車の運転に慣れた者が多い。商売(ビジネス)ができるようになったのは、Berjaya 政権の時代であり、それ以前は、命じられて働く(人に使われる仕事をする)だけだった。Berjaya の時代、ブギスはマレー人としてブミプトラ (*bumiputra*: 法律的に認められた在来民としての地位) として扱われた。けれども、PBS

（「サバ統一政党」）の時代になるとブギスに対して差別が始まった。たとえ国籍を取得しても両親がブギスならば、*bumiputra* として扱われなかった。ブギス人のタクシー運転手がふえたのは、1990年、UMNO になってからだ。²⁶⁾

タクシー運転手のなかには、ハジ・パッティロと同じように、エステートや伐採キャンプを転々として働いた後に、運転手を始める者が多い。最初は他人名義の車を運転し、得た資金で自分の車を購入するというパターンが多い。あるカダザン人の運転手によれば、ブギス人は1台の車を3人で使い回しすることでいつも車を稼働させている。それで儲けが上があれば、車を追加し新たに仲間を運転手に引き入れるのだという。一方、ブギス人になぜ、タクシー運転手にブギスが多いのかという問いに対しては「誰にも命令されずに自分の思うような時間に働くことができる」という答えが返ってくる。パッティロ氏の話しにあるように、伐採キャンプに在る間に車の運転を覚える機会があることも大きな要因だろう。運転技術は、キャンプ地を転々としている間に身につけられる数少ない技能のひとつであり、マレーシアでの生活の目途がたつてからはその技能を生計に生かすというわけである。ブギス語には「泥棒でもいいからボスになれ」といった格言のようなものがある²⁷⁾。タクシー運転手はブギス移民にとって、「自分自身がボスになれる」の数少ない職種の一つなのである。

4-3 リッキー（1972年ボネ県マル生まれ、合板工場勤務）

つづいて紹介するのは、タワウから約20キロ離れた郊外にある日系合板工場で働くラッキーという男である。彼の生活の場は、工場と工場近くにある寮であり、タワウ在住のブギス人とは、ほとんど交流をもっていない。

リッキーは南スラウェシ、ボネ県南部のマルに生まれた。トンラと並んで移民を多く排出する地域である。中学を中退してからは、ぶらぶらしていたが、17歳の時に兄と一緒にタワウにきた。その当時、すでに結婚していたが、後にその妻とは別れてしまった。「自分はこちらで生活するから、別れてもいい」という内容の手紙を送ったという。

ウジュンバンダンからタラカンを経て、ヌヌカンへ行き、そこからタワウへ入った。暗い時間には容易に入国可能だという。ヌヌカンまで来たときには持ち金がすっかりなくなった。衣服もなにもそこで売り払い小銭をつくった。最初は密入国した。金ができてからヌヌカンにもどり、パスポートを作り、あらためて入国した。そのときからラッキーという名前に変えた。「ブギスは新しく身分証明書を作るときに名前を変える。でも、自分はまだ1度しか名前を変えていないよ」とリッキーはいう。

1989年タワウ郊外のタンジュン・バトゥの工場で5年間働いた後、サバ中部の

ケニンガウへ、それから現在の工場に移り、すでに4年になる。最初は、兄と一緒に来たが、兄はタワウで10年間働いてから南スラウェシにもどり、今ではパロポでカカオ栽培をやっている。

ここに勤め始めたのは、人を募集しているという話を知人を介してだという。タワウには人材探しのエージェンシーがあり、その配下(kaki tangan)にはブギス人とか、フィリピン人とかがいる。しかし、ひとつの仕事を得るのに20リングットと仲介料が高い。雇い主が出国費用とか全部もつ場合もあるが、逆に借金でずっとエステートで働かせられる場合もある。

リッキーが勤める工場にはおよそ300人の工員が働いており、そのうち50人ほどがブギス人だという。工員の8割近くを占めるのは、工場周辺の村からやって来る娘たちである。昼夜交替制で、トラックが彼女らを送迎している。ラッキーの役目は現場監督であり、工員同士のもめごとの調整役をするなど工場経営者側の評価は高い。彼の入国の仕方は、自ら語っているように、まず密入国であり、資金を得てからいったんインドネシアに戻りパスポートを申請し、ビザを得て再入国している。故郷にいた妻とは別れ、名前を変えて彼はサバに上陸している。現在、リッキーにはサバで出会った妻と子どもがおり、現在の仕事をずっと続けたいという考えをもっている。実際、リッキーにとって、ボーダーを越えるということは、彼自身のアイデンティティを変えることだったのかもしれない。

V まとめ

本稿の目的は、サバという境界領域におけるブギス人出稼ぎ・移民の生活戦略のあり方を見ることだった。その特徴についてここでまとめることにしよう。

まず、概括的に述べるならば、サバには4つのタイプのブギス移民が存在する。

(1) いわゆる不法労働者と呼ばれる人々：ブギス移民の大部分を占める男性の多くは、官憲の取り締まりの手が届きにくい、エステートや工場、建設現場で働いている。木材業が盛んだった70年代には、エステートと並んで伐採キャンプが有力な職場であった。サバへの女性労働は、食堂・レストランのウエートレス、お手伝いさん、工場などである。男性2に対して女性1といわれており、男性労働が中心である。

(2) 長期滞在者・国籍取得者：1950年代の英領北ボルネオ統治時代にサバへやって来た者の多くはBALエステートで働き、定年退職まで勤めている。また、前節のハジ・パッティロのように、永住権、さらにはマレーシア国籍を取得してタクシー運転手になった者の多くは、遅くとも1970年代にはサバに入国し、エスケー

トと伐採キャンプでの労働を経験している。また、この中には、インドネシア国籍をも保持する「二重国籍」者も多く、インドネシアとの継続的なコネクションを利用して公的・私的な輸入輸出（密輸）ビジネスをおこなう者がいる。

(3) サバ生まれの移民二世及びその子孫：前節にあげたハジ・スンナン氏がその例である。北ボルネオ時代にサバで生まれた例はそれほど多くないが、マレーシア独立以前の「マレーナショナリズム」を経験し、1946年にタワウで設立された「タワウ・ムラユ民族協会」(Persatuan Kebangsaan Melayu Tawau)に参加している²⁸⁾。ハジ・スンナン氏のように商業を生業とする者もいれば、イギリス統治時代に公務員になった者もいる。

一方、第二次大戦後に生まれた移民二世（先の②の次世代）は、マレーシアにおいて高等教育を受け、幹部公務員、銀行員のほか、技術者、医者など専門職に就く者が現れている。この世代は1984年に「サバ・ブギス福祉協会」(Persatuan Kebajikan Bugis Sabah)を結成している²⁹⁾。

(4) 越境バスを利用することでヌカン、スパティック島より物資の搬出入をおこなうブギス人である。すでに東カリマンタンでの生活が長く、かれらは自身で野菜、物資を持ち込み日用品市場で商売するほか、密輸ビジネスの運搬役をしばしば担っている。かれらから見れば、タワウは東カリマンタンから連続する生活圏の一部であり、タワウは其中で欠くことの出来ない重要な商売先になっているのである。

インドネシアとマレーシアの農業開発のあり方は大きく異なる。インドネシアにおいては近年まで国家主導による、農民個人の技量と努力に依存した農村開発が進められてきたのに対して、マレーシアでは、企業を中心としたエステート（農園）開発が主流であった。これを移民の立場から見ると、インドネシアでは家族・親族を労働力として動員し、集団的に生業に従事することが可能（「開拓型」）であるのに対して、マレーシアでは、個人中心の労働力がもてめられるだけである。すなわち、サバでは、スマトラに多く見出されるような自発的な開拓者(transmigran spon-tan)として生きることは、ほとんど不可能なのである。インドネシア国内においてはそれほど省みられることのないタクシー運転手という職種が、サバにおいてはブギス移民を特徴づける生業となっているのは、そうしたサバにおける労働環境、ひいてはボーダー・エコノミーの限定性を示すものだろう。

謝辞：

本稿は文部科学省科研費『ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究』（研究代表者 宮崎恒二東京外国語大学教授）の調査成果にもとづいております。筆者に調

査の機会を与えて下さった関係諸機関に深く感謝の意を申し上げます。

なお、2006年3月掲載しているのも、それ以降の諸変化（統計的事実も含む）は、反映されていない。

注

- 1) 本節では「移民」(migrant)という語を、長期滞在者、出稼ぎ者をも含む意味で用いている。実際、当初から移住目的でサバにやって来るものは少ないと一般に言われている。
- 2) 正確には、マレーシア、サバ州であるが、本稿ではとくに必要のない限り、サバと表記する。
- 3) 本来、ヌヌカンの住民を対象に支給されるもので、家族親族訪問や社会的活動を目的として最長30日間のタワウ滞在が許可される。法的には、南スラウェシ出身者が越境パスを入手するためにはヌヌカンに6ヶ月以上滞在していることを証明しなければならない。注10も参照。
- 4) 後述する「カンボン・イマム」が、現存する集落としては、もっとも古いブギス人集落であると言われている。
- 5) 「ブア・アド」とは個人名ではなく、一種の称号である。たとえば、1681年にサマリンドのブギス集落を拓いたというわれるダエン・マンコナも最初のブアドであるといわれる。
- 6) British North Borneo Herald.1901. p.291 "Ode to penghulu Puado, Government Chieftain, Tawao"
- 7) 当初、プランテーション事業に参入した折田一はのちに漁業に転じ、「ボルネオ水産公司」を設立している。詳しくは、松本[1981]を参照。
- 8) 1950年から始まるカハル・ムザッカルの反乱は、まもなくイスラーム国家建設運動（ダルール・イスラーム）となって、インドネシア国軍と10年間に及ぶ戦闘を繰り返すことになる。
- 9) この時期サバに渡ったってきた者の中には、インドネシア国家に反旗を翻したダルール・イスラームの旧メンバーが相対的に多い。現在、サンダカン近郊でエステートを経営するA氏は、もっとも裕福なブギス人ともいわれるが、反乱軍の中隊長を務めた人物であることがブギス人の間で知られている。
- 10) Ongkili[1989]を参照。
- 11) 当時の環境大臣エミル・サリムの発言
「1980年の調査によると南スラウェシからの転出先は東カリマンタンに移っており、511,725人の転出人口のうち17%が東カリマンタンを目的地としている。…また大部分が小学校卒業程度の学歴で、農業従事者である点である。。。」(1984年5月26日付け「ブドマン・ラヤット」紙より)。なお、私がボネ県トンラ郡でおこなった転出台帳の調査によると、1986年ー1988年(8月)までの延べ72人のうち、ヌヌカンが47名と全体の65%を占め、東カリマンタン州を目的地とする者は73.6%にも達している。これに対しスマトラのジャンビ、パレンバンへはわずか7名に過ぎない。
- 12) サバ政府は、不法居住地で暮らす26000世帯を目標に、低価格住居の建設を予定しており、2006年にはその10%を実現したという(2006年2月13日付け「デイリー・イクスプレス」紙)。
- 13) 2002年3月12日付け「デイリー・イクスプレス」紙。
- 14) 新聞記事の'traveling pass'とは、インドネシア語でいう'Pas Lintas Batas'(越境パス)に該当すると考えられるので「越境パス」と訳しておく。

- 15) 同時に、その取り締まりにより、総計 25 キロ入りのインドネシア産米袋 67 個、フィリピン製ワイン 24 本、インドネシア製タバコ 24 カートンが押収されたという (2001 年 3 月 22 日付け「デイリー・イクスプレス」紙)。この品目から、
- 16) サバから脱出した不法労働者たちで溢れかえったヌヌカン島では収容施設、食糧の不足と衛生環境の悪化が生じ、死者が出た。フィリピンでも同様な事態に陥ったため、人権的な見地からマレーシア政府に抗議した。
- 17) たとえば、バクティアル・アラム 1998 (mimeo.) 「東カリマンタンの越境労働者」。また、「インドネシア人労働者がいなければマレーシアのエステート経営はできない」というユスフ・カラ現副大統領の発言。
- 18) 「マレーシア、インドネシアからの木材輸入を禁止」2002 年 6 月 13 日付け「デイリー・イクスプレス」紙。
- 19) サバの企業家が製材機械を東カリマンタン側に持ち込み、積極的に盗伐に関与しているとの報道がある。サンダカン郊外で油ヤシエステートを経営するブギス人企業家 A 氏も、最近では東カリマンタンに本拠地を移し、伐採ビジネスを始めている。
- 20) マレーシア国籍取得後もインドネシア国籍を保持することで、その立場をビジネスに利用するケースがある。
- 21) 2001 年 8 月 18 日付け「デイリー・イクスプレス」紙。アンボンでは、地元民であるキリスト教徒とブギス、ブトン、マカッサル人に代表される外来のイスラーム教徒との間で抗争が続いている。
- 22) 2002 年 7 月 14、16 日付け「コンパス」紙。なお、ニトロ・アンモニア化合物は、爆弾漁に使用される可能性が高いと考えられる (赤嶺淳氏との私信による)。
- 23) 2001 年、ブギス人が運転するタクシーにタワウ空港から乗ったときの情報である。
- 24) コタキナバルでタクシー業を営む華人のピーター氏は、かつては輸出業をおこない、日本にも何回が訪れたこともある。しかし、事業に失敗してからは、タクシーを運転している。
- 25) スカルノの対決政策に賛同した組織と思われるが、この組織の詳細について多くを語らず不明。
- 26) 多くのブギス人がマレーシア国籍取得後も、被差別感情を抱いているのは事実である。それゆえに、多くの前では「ブギス人」出身であることを隠そうとしたり、「ブギスといえば出世できない」という者もいる。
- 27) 元ハサヌディン大学教授で郷土史に詳しいアンディ・ザイナル・アビディン氏との私信による。
- 28) これについては伊藤[2002]を参照。
- 29) 同団体は、一時は会員 2 万人を越える勢いをもったが、1999 年選挙における会員のニセ IC (身分証明書) にもとづく有権者投票問題を発端として、2002 年より活動停止状態にある。これに替わり、より小規模の団体再結成の動きがある。

参考文献

- British North Borneo Herald 1901. "Ode to penghulu Puado, Government Chieftain, Tawao" p.291
- Lee Yong Leng 1965 : North Borneo a study in settlement geography. Singapore : Eastern Universities Press LMD.
- Jabatan Perangkaan Department of Statistics *Perangkaan Estet-Estet Kelapa Sawit, Kelapa dan Koko Sabah 1968, 1969, 1970, 1971, 1972, 1973, 1974, 1975, 1977, 1979.*
- Mesyuarat Perwakilan Ke-7 *Persatuan Kebajikan Bugis Sabah.* 20 hb Julai, 1997.
- Ongkili, Datuk James 1989 P. "Political Development in Sabah, 1963-1988", in, Jeffrey G. Kitingan & Maximus J. Ongkili (eds.) *Sabah 25 years later.* IDS : Kotakinabalu.
- Statistical handbook of Sabah* 1994
- Sabiha, Osman 1998 "Jaoanese Economic Activities in Sabah.", *Journal of Southeast Asian Studies* vol.29 (1).
- Tarling, Nicholas 1978 : *Sulu and Sabah.* London : Oxford University Press.
- Tregonning, K. G. 1965 *A History of Modern Sabah (North Borneo 1881-1963).* Kuala Lumpur : University of Malaya Press.
- Warren, James F. 1981 : *The Sulu Zone 1768-1898.* Singapore : Singapore University Press.
- Yusin, Muhiddin 1990 : *Islam di Sabah.* Kuala Lumpur : Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 伊藤 眞
- 1994 「ブギス人移住者のプロフィール—南スマトラ、パレンバン、の海運業者を中心に」 *人文学報* No.251 : 83-112
- 2003 「サバのブギス移民」 *人文学報* No.338 : 59-85
- バクティアル・アラム
- 1998 (mimeo.) 「東カリマンタンの越境労働者」、東京外国大学アジアアフリカ言語文化研究所。
- 松本国雄
- 1981 『シアミル島 北ボルネオ移民史』東京：恒文社。